

# 北欧のオリエンテーリングはなぜ強いのか

## スウェーデンとノルウェーの競技環境から探る

松澤俊行<sup>1</sup> 杉浦 恭\*

Toshiyuki MATSUZAWA<sup>1</sup> Takashi SUGIURA\*

\*保健体育講座

### はじめに

オリエンテーリングは、山野や森林を競技場とする個人スポーツである。「ナビゲーション(進路の決定と維持)を伴うクロスカントリー走」と説明でき、「21世紀のスポーツ」とも言われる。地図を読んで進路を決定し、現在地点から先に現れる風景をイメージしながら林の中を駆け抜け、所定のポイントを正確に通過して行くことが求められる。勝敗はタイムで競われるため、走力に加えてタイムロスを防ぐための技術が必要となる。

オリエンテーリング競技の世界において、国際的な強豪とされるのはオリエンテーリング発祥の地でもある北欧諸国である。2007年までに開催24回を数える世界オリエンテーリング選手権で競われた130レース中、91レースで北欧諸国(スウェーデン、ノルウェー、フィンランド、デンマーク)の選手もしくはリレーチームが優勝している。これらの国々は世界選手権出場国数が20カ国に満たなかった1960年代、1970年代だけでなく、出場国数が40に上る現在でも常に上位に位置する。中でもスウェーデンは38回、ノルウェーは34回の優勝を誇る二強である(表1、表2)。

本稿は、オリエンテーリング競技において北欧諸国、特にスウェーデンとノルウェーがなぜ世界的な強豪国であり続けているのか、歴史や組織に注目して考察することを目的とする。方法は、文献研究と現地調査によった。

北欧諸国はオリエンテーリングの世界選手権に限らず、オリンピックなど多くの国際スポーツ大会で活躍を見せている。オリエンテーリングはオリンピック種目ではないものの、国際的な競争が行われるスポーツである。特定の種目に焦点を当てて、特定のスポーツ強国の文化や環境を知ろうとする試みは、わが国のスポーツ環境を省みる上でも有益であろう。

なお、文中では諸外国の地名や人名を、発音が近いカタカナを当てて日本語で表記した。諸外国の公的機

関やスポーツ組織の名称は、参考文献や資料に倣って表記した。参考文献中に日本語訳が記載されていない組織名等については、筆者が適切と思われる訳語を当てて表記した。

### 1. オリエンテーリングの歴史

オリエンテーリングは、元来、軍事目的で行われた森の中のナビゲーションを競技化したスポーツであり、当初はスキーを履いて行われた。世界初の競技会とされる大会は、1897年5月13日にノルウェーのベルゲンで開催された。

1907年にはスウェーデンのストックホルム近郊で、初めて「走るオリエンテーリング」の大会が開催された。スウェーデンでは、オリエンテーリングは当初陸上競技の一種目とされ、1919年7月にはストックホルム陸上競技連盟がオリエンテーリング大会を開催した。220人の参加者を集めたこの大会開催を提唱したのは、スウェーデンオリエンテーリングの黎明期を支えたアーンスト・シランデル(Ernst Killanders)であった。陸軍大佐経験者でありながら、オリエンテーリングから軍事色を排除し、普及に尽力したシランデルは、スウェーデンで「オリエンテーリングの父」と呼ばれている。

その後オリエンテーリングの普及が進んだスウェーデンでは、陸上競技連盟からの独立の気運が高まり、1938年のスウェーデンオリエンテーリング連盟創設に至った。この連盟には、創設当時すでに630のクラブ、16,000人の加盟員が登録していた。

スキーを履いて行うオリエンテーリングの最初の大会はノルウェーで開催された。一方、走って行うオリエンテーリングの最初の大会はスウェーデンで開催された。この記録から、競技オリエンテーリング発祥の地はノルウェーともスウェーデンとも言われ、両国はオリエンテーリングの世界では盟主的な存在と見なされている。

その後、オリエンテーリングは北欧以外の国々にも拡がり、1961年に国際オリエンテーリング連盟(略称IOF)が組織された。IOF創設当時の加盟国はブルガリ

1、愛知教育大学大学院学生 (Graduate Student, Aichi University of Education)

ア、西ドイツ、チェコスロバキア、デンマーク、東ドイツ、フィンランド、ノルウェー、スウェーデン、スイス、ハンガリーのヨーロッパ10カ国であった。2007年8月現在のIOF加盟国は正加盟49カ国・準加盟20カ国の合計69カ国で、加盟国の所在地はヨーロッパにとどまらず世界各地に広がっている。

1966年にはフィンランドで第1回世界オリエンテーリング選手権大会が開催された。世界選手権は2007年までに24回、15ヶ国で開催されて現在に至る。19回大会までは隔年開催であったが、2003年以降毎年の開催となった。2007年現在、世界選手権はスプリントディスタンス、ミドルディスタンス、ロングディスタンスの距離別個人戦3種目と、リレー形式で行われる団体戦1種目で競われている。<sup>\*1</sup>

ちなみに、日本は1969年にIOFへの加盟承認を受け、1976年の第6回世界選手権大会に初出場した。さらに2005年には第22回世界選手権大会開催国となっており、アジアのオリエンテーリング界をリードしている。ただし、これまでの世界選手権の最高位は個人23位、リレー11位であり、アジアの国としては最高ではあるものの、入賞経験はない。

## 2. 北欧のスポーツの歴史

一般的にノルウェー、スウェーデン、フィンランド、デンマークの4カ国の位置する地域を「北欧」と呼ぶ。この4カ国にアイスランドを加えた5カ国の総称を「北欧」とする場合もある。

北欧諸国は、世界のスポーツ史において無視できない取り組みを見せてきた。遡れば、アイスランドに残される中世歴史物語には、現代北欧の各種スポーツ選手権に匹敵する競技会がアイスランドで行われたという記述が見られる。この記述が事実であれば、いわゆる「ヴァイキング」と呼ばれる人々がスポーツ競技会を楽しんでいたということになる<sup>1)</sup>。

近代に移ってからも、北欧では身体運動への顕著な取り組みが見られた。スウェーデン国内とデンマーク国内では19世紀前半に、強力な国民国家の建設を目標に「スウェーデン体操」「デンマーク体操」がそれぞれ確立された。これらは近代スポーツ史において、ドイツに続き「国民体育」を先駆けて定着させた事例として知られる。ナショナリズムの象徴である「国民体育」は、競技化、標準化され、国際的に広がっていくスポーツとは異なる性格を持つ<sup>2)</sup>。しかし、「体を動かす文化」が国民に浸透したことが、その後北欧諸国にスポーツが広まる素地となったのは確かであろう。桑原<sup>3)</sup>は、「北欧の人々が近代スポーツを受け入れることに時間はかからなかった。1850、60年代より各種の英国型のスポーツが北欧各地で行われ、スポーツを喜んで招き入れた感がある」近代スポーツの国際化に北欧は最

も素早く反応し、近代オリンピックの復興時に多大な貢献をしている」と、北欧スポーツ界の先進性を高く評価している。

北欧諸国は、20世紀以降も一貫して国民的な余暇活動としてのスポーツを重要視しており、「スポーツは国民の共有財産」とする意識が非常に高い。ノルウェーでは、1960年代後半からスポーツ普及運動の「トリム運動」(Trimm)が始まり、この運動は急速にヨーロッパ各地に波及した<sup>4)</sup>。

国際的な「みんなのスポーツ」運動に先鞭をつけたノルウェーは、ヨーロッパ諸国の中でも特に野外スポーツに対する興味・関心が高いという特徴を持つ。ノルウェーの国土の20%は海拔900m以上の山岳地帯である。西部および北部は、居住が不可能な岩山やツンドラ地帯であり、中部および南部の丘陵、森林地帯の間や海岸線に沿った地帯に人口が集中している。地理的状况は、決して良いとは言えない。それでも、彼らはこの地理的状况を呪っているわけではなく、むしろ厳しい地形をチャレンジングなものにとらえ、誇りにしている<sup>5)</sup>。

このようなノルウェーで愛好される代表的な野外スポーツとして、「スキー」「釣り」「トレッキング(山歩き)」等が挙げられる。オリンピックでは、特に冬季において「スキー」「バイアスロン」「ノルディック複合」といった野外スポーツ種目を中心に高い成果を挙げ続けている。バイアスロンは日本人にはなじみが薄いスポーツであるが、ノルウェーではトップ選手が国民的英雄としての扱いを受けている。ノルウェーの冬季オリンピック通算獲得メダル数は280個と、2007年時点でドイツ、ロシアに次いで3位に位置する。<sup>\*2</sup>夏季オリンピックでも、野外スポーツでの活躍は初期から目覚ましい。この特徴はノルウェーにおいて顕著であるが、他の北欧諸国でも同様な傾向が見られる。<sup>\*3</sup>

野外スポーツであるオリエンテーリング競技での北欧諸国の活躍の背景には、豊かで厳しい自然環境に支えられた国民的な野外スポーツ熱が存在する。

## 3. 北欧諸国のオリエンテーリング環境

### 1 社会制度

小泉<sup>6)</sup>は、スウェーデンの首都、ストックホルム・コミュンに近接するヤーフェラ・コミュンを拠点とするヤーフェラ・オリエンテーリングクラブを調査対象に、スウェーデンのオリエンテーリング環境について報告した。報告には、スウェーデンで認められている、誰もが所有者の許可なく森に立ち入ることができる権利、「森林享受権」について記されている<sup>7)</sup>。

ノルウェーにおいても同様の権利を認める法律が定められている。開拓されていない土地に入ったり、通り抜けたりする権利が誰にでもあり、特別な理由で立

立ち入り禁止とすることが認められる場所以外は、森林であれば私有地であっても林業用地であっても立ち入りが可能である。この権利は慣行として古くから認められていたが、1957年に正式に法制化された。駐日ノルウェー大使館ウェブサイトでは、この権利を「アクセス権」と表現し、「これは自然に対する敬意に根ざしており、訪れる人はみな、農家の人、土地の所有者、他の訪問者そして環境に配慮をすることが求められています」と説明している。さらに、「Outdoor Recreation Act(野外レクリエーション法)の下では、自然へのアクセスを妨げる塀や柵の設置は認められていません」ということも明示されている。<sup>\*4</sup>

こうした法制度は、森林内を縦横無尽に走ることが要求されるオリエンテーリング競技の発展に寄与している。森林内への立ち入りが自由であれば、練習や大会開催が行いやすくなるからである。ちなみにデンマークは北欧に位置しているものの、私有地である森林への立ち入りに関してノルウェーやスウェーデンほどの寛容さはない。デンマークで開催され、筆者(松澤)も出場した2006年世界オリエンテーリング選手権においては、一部競技エリアで土地所有者の使用許可が下りず、そのエリアを回避してコース設定がなされた。

また、スウェーデンやノルウェーでは、学校教育でもオリエンテーリングがカリキュラムの一つに含まれ、誰もが経験する機会を得ている。学校でオリエンテーリングが行われる際には、教職員でない地域オリエンテーリングクラブのメンバーが技術指導その他を担当することもある。そうした授業は、体育というより近年日本で導入された「総合的な学習の時間」に近い形態を取っていると思われる<sup>8)</sup>。

## 2 組織

小泉は、スウェーデンにおいて地域スポーツクラブが有している価値について「スウェーデン社会において、スポーツ活動は公共財である。スポーツクラブはその公共財を享受できる公共サービス機関としての役割を期待されている」と述べた。加えて、調査対象としたヤーフェラ・オリエンテーリングクラブが組織的に実施する、各年齢層を対象とした様々なプログラムやユース世代の育成方法を紹介し「スポーツ団体としてだけでなく、地域社会において総合的な社会団体としての性格も有している」と報告した<sup>9)</sup>。

また、筆者(松澤)は2006年8月に実施したノルウェーのクリスチャンサン・オリエンテーリングクラブを対象とする調査から、上記の特徴はノルウェーのオリエンテーリングクラブにも当てはまることを報告した<sup>10)</sup>。そして、充実した地域スポーツクラブの活動の背景には、国全体に磐石な組織構造が存在することを確認した。図1はノルウェーのスポーツ組織を表し

ている。

ノルウェーにおいては、国のスポーツ組織の頂点にノルウェースポーツ連盟が位置付けられる。その下に55のスポーツごとの統括団体が存在し、さらにスポーツごとの統括団体の下に各地域の特定スポーツ統括団体、そして各スポーツクラブが位置する。また、ノルウェースポーツ連盟の下部には、各「スポーツ区」の統括団体も位置付けられる。ノルウェー国内は19スポーツ区に分割され、さらに各スポーツ区がいくつもの地域に細分化されている。各スポーツの地域クラブは、その地域統括団体の下部組織でもある。なお、複数の種目を実施する総合スポーツクラブの場合は、クラブ内の「各スポーツの部門」が、それぞれ特定スポーツの統括団体の下部組織となる。

ノルウェースポーツ連盟の下部組織であるクラブには、ノルウェースポーツ連盟の定める規程に準じたクラブ内規程を定めることが義務付けられている。規程は、クラブ内で定める手順に従って改訂することができるものの、上部組織に改訂の申請を行い、承認を得なければならない。こうした制度は煩雑である一方、逸脱した活動の防止となる。各クラブの社会的信用は保証され、「国から公式に認められた団体に所属している」というクラブ員の帰属意識と安心感、責任感も醸成できると考えられる。ノルウェースポーツ連盟の集計によると、2003年時点のノルウェースポーツ連盟傘下のスポーツクラブは12,334クラブ、加盟員は157万9,711人である。このようなデータが正確に把握されていることから、国によるスポーツ団体の管理・統制が行き届いていることも分かる。<sup>\*5</sup>

小泉は、スウェーデンにおいても同様に管理制度が充実していることを報告している<sup>11)</sup>。また広範囲に渡り北欧諸国のスポーツ環境を調査した日本の有識者は、「北欧社会は社会民主主義の発達した、資本主義社会と共産主義社会の間あたりの社会」スポーツに限らず、現在わが国では資本主義の国といいながら、社会主義的な政策を導入しなければならない段階に来た」と述べている<sup>12)</sup>。管理制度の充実は、傘下の地域クラブへのサービスの充実にもつながる。こうした組織では、選手や指導者育成のための体系的で一貫したプログラムも提供しやすいと考えられる。

日本体育協会ウェブサイトに掲載されている組織図を見ると、日本体育協会傘下には55種目のスポーツ協会と、47都道府県スポーツ協会が位置付けられている。<sup>\*6</sup> 一見、ノルウェーやスウェーデンのスポーツ組織と同じ構造を有しているように見える。しかし、日本の地域スポーツクラブは、過去も現在も学校クラブや企業クラブほどのスポーツ拠点としての機能を、とりわけ選手育成組織としての機能を獲得していない。日本体育協会加盟スポーツ協会である日本オリエンテーリング協会が、2007年時点で明確なクラブ登録制

度を定めていないことは象徴的な事例である。地域オリエンテーリングクラブに注目して、日本とスウェーデンやノルウェーのスポーツ組織を比較した場合、日本体育協会の組織制度は北欧諸国の組織制度ほど整備されていないことは明らかである。スポーツ組織構造を通して社会制度を概観すると、有識者たちが認めるように、北欧には日本のモデルとなり得る価値が充分にあると考えられる。

### 3 競技者養成システム

こうした歴史や組織に支えられた北欧諸国では、競技スポーツとしてオリエンテーリングを愛好する国民が多数存在する。表3は、日本、スウェーデン、ノルウェー三国のオリエンテーリング協会登録者数を示している。なお、クラブ登録制度が明確でない日本では、地域オリエンテーリングクラブに所属しているもののオリエンテーリング協会へ登録せずに大会に出場する競技者もいるため、実際にはこの数字よりも多数の愛好者が競技活動を行っている。また、スウェーデン、ノルウェー両国では地域クラブが「家族会員制度」を設け、実際に競技活動を行わず家族の活動の支援に徹する会員を抱える事例がしばしば見られる。すなわち、表中の数字に算定されている者の中にも一切オリエンテーリングをしない者もいるということになる。それらの事情を勘案すれば差が縮まるとはいえ、スウェーデン、ノルウェーの両国が有するオリエンテーリング競技人口は、あらゆる世代で日本での競技人口をはるかに凌いでいる。家族会員制度は登録者数の水増しを招いている感はあるが、そうした制度の定着自体が、子どもをはじめとした初心者の支援につながり、競技者の確保に寄与しているとも考えられる。

小泉によれば、スウェーデンオリエンテーリング協会は子どもをクラブに根付かせることが重要であると考え、子どもや初心者にオリエンテーリングを教え、育てられる指導者の育成プログラムを計画、実施している<sup>13)</sup>。また、ノルウェーのクリスチャンサン・コミュニティでは、地域の有力なオリエンテーリングクラブが、クラブ内の育成プログラムとは別に、本拠地周辺の13校の小学校に赴いてオリエンテーリング大会を開催している。この大会を企画・運営したクリスチャンサン・オリエンテーリングクラブは、さらに各小学校の代表を集めて市内小学生チャンピオン決定戦を開催し、好成績を修めた小学校に、後日世界チャンピオンクラスの競技者を派遣してオリエンテーリング講習を行った。この大会をきっかけとしてクリスチャンサン・オリエンテーリングクラブに入会する小学生もいた<sup>14)</sup>。これらは、地域スポーツクラブが「スポーツ団体としてだけでなく、地域社会において総合的な社会団体としての性格も有している」ことを証明すると共に、北欧のオリエンテーリング界に、地域クラブが中

心となって新たな競技者を発掘、勧誘、養成するためのシステムが構築されていることを物語っている。

こうして常に競技者が生み出され続ける北欧では、オリエンテーリング大会会場にあらゆる年齢層の競技者が集まり、各自の競技レベルに合わせて競争を楽しんでいる。ノルウェー最大の大会は数千人の参加者が集まる。スウェーデンで開催される世界最大規模のオリエンテーリングイベント「オーリンゲン大会」は、5日間の総合成績で順位を決定する競技会であり、全クラスの参加者数の合計は、1日当たり10,000人を超える。これら北欧の大型オリエンテーリング大会会場の熱気は、日本の大型市民マラソン大会に匹敵する。

日頃の練習環境も充実している。北欧の地域クラブに所属している競技者は、専用のクラブハウスをミーティングや仲間との交流の拠点にし、近隣の森林に足を運んで練習に励む。ノルウェーのクリスチャンサン・オリエンテーリングクラブのように、クラブハウスを有していなくても協力関係にある学校の空き部屋を借りて拠点を確保し、更衣や資材管理を行うクラブもある。

もちろん、地域クラブに所属していない競技者にも練習の機会は用意されている。オリエンテーリングは、熟練者によって調査、作図された専用の地図がなければ行えない競技である。オリエンテーリングの盛んな国には、オリエンテーリング専用地図作成部門を設けている地図作成会社も見られる。北欧諸国ではオリエンテーリング専用地図も広く販売され、手に入れやすい。例えば、クリスチャンサン・オリエンテーリングクラブの活動拠点周辺では、クラブ員が設定したコースを描き込んだ地図を、学校、銀行、ガソリンスタンド、商店等、市内各所で購入できる。

こうして多くの愛好者が日常的にオリエンテーリングを楽しむ機会に恵まれる北欧諸国では、国際的な選手権大会が開催される際には、数千人の観客が会場に押し寄せることも珍しくない。北欧諸国では、オリエンテーリング愛好者の発する熱気が、トップ選手の高い競技力を生む支えとなっている。

## おわりに

元々オリエンテーリングは森の中で行われるため、観戦が難しい競技である。トップレベルの試合も観戦者の大半は、自分自身もオリエンテーリング競技会に出場する愛好者であり、ショービジネス化、商業化は進んでいない。世界チャンピオン級の選手もプロフェッショナル競技者として過ごす期間は短く、公的機関やスポンサーから得る収入もそれほど多いわけではない<sup>15)</sup>。それでも北欧諸国からは、絶えず高い競技力を発揮する選手が輩出される。北欧出身でない国際的トップ競技者の中にも、良好な環境に惹き付けられ

て北欧に滞在し、地域クラブに所属しながら練習を続ける者が多い。

ノルウェーやスウェーデンをはじめとする北欧諸国のオリエンテーリング競技の強さは、森林が豊富であるという自然環境の他、オリエンテーリング界のみならずスポーツ界全体や社会全体を覆う歴史、制度、組織構造に支えられている。中には、「森林享受権」「中央集権的クラブ登録制度」といった、日本など他の国々には見られない要因もあり、他国との差別化に決定的な役割を果たしている。

本稿では、北欧諸国のオリエンテーリングがなぜ強いのか、その要因を文献と現地調査から分析した。北欧諸国の強さは北欧ならではの環境に支えられており、他国がそれらをそのまま導入することが困難な要因もある。今後、日本のオリエンテーリングの発展のためには、北欧諸国のオリエンテーリングを取り巻く組織や制度から学ぶと共に、国内で見られる国際的な成功経験のある他のスポーツの先例に学ぶ必要がある。

- 6) 小泉成行 2005, 『スウェーデン地域クラブの社会的役割』筑波大学修士論文
- 7) 前掲書 6), 7頁
- 8) 松澤俊行 2007, 「地域オリエンテーリングクラブによる若年競技者養成に関する基礎的研究 - ノルウェー・クリスチャンサンオリエンテーリングクラブの事例より - 」愛知教育大学卒業論文
- 9) 前掲書 6), 89頁
- 10) 前掲書 8)
- 11) 前掲書 6)
- 12) 安田正二, 三宅克彦, 桑原一良, 徳永敏文, 山下立次, 岡本悦子 1993, 「討論編 - 共有財としてのスポーツをめぐって - 」北欧スポーツ研究会編『北欧のスポーツ - スポーツは共有財 - 』道和書院, 177-193頁
- 13) 前掲書 6)
- 14) 前掲書 8)
- 15) 前掲書 8), 22-23頁

(平成19年 9月13日受理)

## [ 註 ]

- \* 1 初期の世界選手権は、現在のロングに相当する個人戦1種目と、リレー形式の団体戦の合計2種目で競われた。個人種目は1991年に2種目に、2001年に3種目に増え、現在に至っている。
- \* 2 1位はドイツで328個(統一以前の東西ドイツの獲得数も合算)、2位はロシアで293個(ソ連時代の獲得数も合算)。日本の冬季オリンピックメダル獲得数は32個。  
(参考: 国際オリンピック連盟ウェブサイト <http://www.olympic.org/uk>)
- \* 3 2004年夏季アテネオリンピックでのノルウェーのメダル獲得種目はカヌー、マウンテンバイク、ボート、ヨット、2006年冬季トリノオリンピックでのノルウェーのメダル獲得種目はスキー(アルペン、クロスカントリー、ジャンプ、フリースタイル)、バイアスロン、ノルディック複合、スノーボードと、いずれも野外スポーツであった。  
(参考: 国際オリンピック連盟ウェブサイト <http://www.olympic.org/uk>)
- \* 4 <http://www.norway.or.jp/>
- \* 5 <http://www.nif.idrett.no/>
- \* 6 <http://www.japan-sports.or.jp/about/org-1.html>

## 引用・参考文献

- 1) 桑原一良 1993, 「北欧スポーツの歴史」北欧スポーツ研究会編『北欧のスポーツ - スポーツは共有財 - 』道和書院, 1-3頁
- 2) 野々宮徹 1995, 「近代のスポーツ」稲垣正浩・谷釜了正編著『スポーツ史講義』大修館書店, 70-80頁
- 3) 前掲書 1), 2頁
- 4) 金崎良三 2000, 『生涯スポーツの理論』不昧堂, 42-43頁
- 5) 坂口芳江 1997, 「北欧の歳時記 - 白夜の国々」武田龍夫編『北欧が見えてくる』サイマル出版会, 1-27頁

表1 世界オリエンテーリング選手権大会の国別優勝回数

順位	国名	優勝回数 (回)
1位	スウェーデン	38
2位	ノルウェー	34
3位	スイス	21
4位	フィンランド	17
5位	フランス	5
6位	ハンガリー	3
6位	デンマーク	3
6位	ロシア	3
9位	チェコ	2
9位	イギリス	2
11位	オーストリア	1
11位	ウクライナ	1
11位	オーストラリア	1

国際オリエンテーリング連盟ウェブサイト (<http://www.orienteering.org/>) から作成。  
合計が131となり、レース数(130)を上回っているのは二選手の同タイム優勝が一回あるため。

表2 世界オリエンテーリング選手権におけるスウェーデン・ノルウェー両国の優勝種目数

大会回数	開催年	開催地 - 国名は開催当時 ( )内は団体戦出場国数(男・女)	スウェーデン 優勝種目数 (優勝数/ 種目数)	ノルウェー 優勝種目数 (優勝数/ 種目数)
第1回	1966年	フィンランド (10・9)	3/4	1/4
第2回	1968年	スウェーデン (13・9)	3/4	1/4
第3回	1970年	東ドイツ (14・12)	1/4	3/4
第4回	1972年	チェコスロバキア (12・12)	1/4	1/4
第5回	1974年	デンマーク (15・14)	3/4	0/4
第6回	1976年	イギリス (16・16)	2/4	1/4
第7回	1978年	ノルウェー (20・17)	0/4	3/4
第8回	1979年	フィンランド (19・17)	1/4	1/4
第9回	1981年	スイス (21・18)	2/4	2/4
第10回	1983年	ハンガリー (22・17)	2/4	2/4
第11回	1985年	オーストラリア (16・14)	2/4	1/4
第12回	1987年	フランス (22・18)	2/4	2/4
第13回	1989年	スウェーデン (25・20)	2/4	2/4
第14回	1991年	チェコスロバキア (24・19)	2/6	0/6
第15回	1993年	アメリカ (31・21)	3/6	1/6
第16回	1995年	ドイツ (34・24)	1/6	0/6
第17回	1997年	ノルウェー (23・25)	1/6	2/6
第18回	1999年	イギリス (30・23)	0/6	4/6
第19回	2001年	フィンランド (34・22)	1/8	2/8
第20回	2003年	スイス (37・30)	1/8	0/8
第21回	2004年	スウェーデン (33・24)	3/8	3/8
第22回	2006年	日本 (27・23)	1/8	1/8
第23回	2006年	デンマーク (38・28)	1/8	1/8
第24回	2007年	ウクライナ (39・24)	0/8	0/8
合 計			38/130	34/130

国際オリエンテーリング連盟ウェブサイト (<http://www.orienteering.org/>) から作成

表3 総人口とオリエンテーリング連盟登録人口 日本・スウェーデン・ノルウェー三国の比較

	総人口 (人)	連盟登録人口概数 (人)	人口 1000 人当たり登録人数 (人)
日本	1 億 2800 万	1,400	0.07
スウェーデン	911 万	100,000	11
ノルウェー	464 万	30,000	7

引用 - 参考文献8) より。

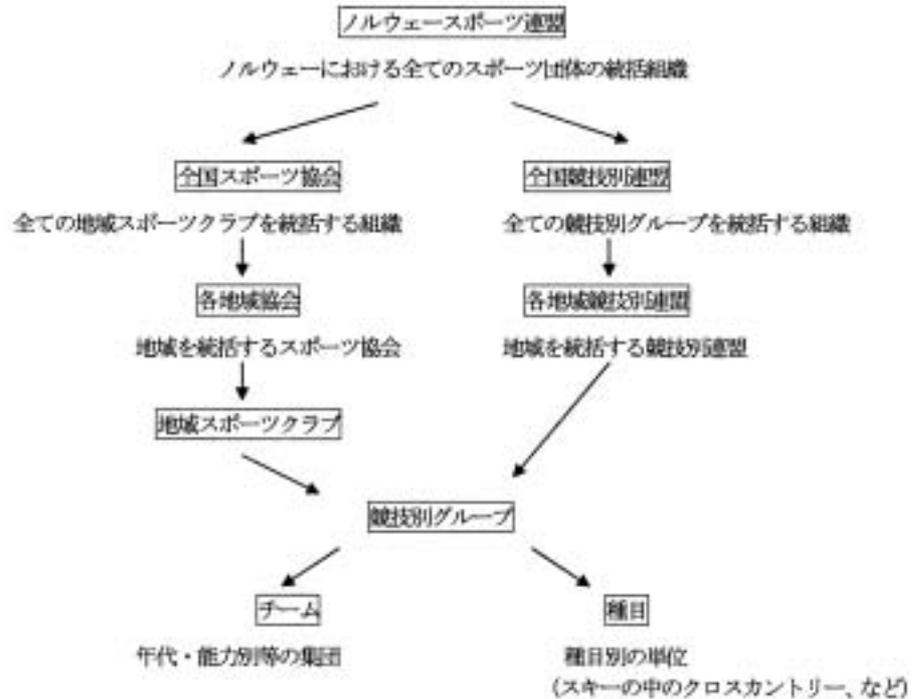


図1 ノルウェーのスポーツ組織図

Norges Idrettsforbund og Olympiske Komité (NIF: ノルウェースポーツ連盟) 2004, *Sport and Physical Activity in Norway*. を筆者が日本語訳して作成した。

